

アートフェア東京 最多の5万人来場

国内外の138画廊が美術品を展示販売する「アートフェア東京2010」が2〜4日、東京・有楽町の東京国際フォーラムで開かれた。デビューも含めた4日間で、昨年より5千人多い、過去最高の約5万人が訪れた。

同フェアは今回で5回目。参加画廊は古美術から現代美術まで多様で、海外からも香港、北京、モスクワ、パリなどの12画廊が参加した。辛美沙・エグゼクティブディレクターによると、入場者は4代から60代が多く、実際に購入するものもこの世代だという。「フェアでは多くの



約3千点の美術品が並んだ「アートフェア東京2010」＝東京・有楽町

画廊を回って作品や値段を比べられるので、「現代美術は敷居が高い、値段が不透明」との印象をぬぐえる。リピーターが生まれ、「見る」から「買う」への流れもできた。ただ日本では住宅事情などから大きな作品は売れず、値段も10万円台

がよく売れるなど、海外のフェアに比べ、売り上げの規模は小さい。現代美術を扱うある画廊は「不況の影響は底打ちした感じが、購入層はそう簡単に広がらない」と話す。

他方、今年1月には、現代美術を扱う15の画廊が「規模より質の追求」をうたい、アートフェア「Gittokyo2010」を東京で初めて開いた。来場者は3日間で約5200人。中国や台湾、韓国などアジアのコレクターも多かったという。

15のうち9画廊は、アートフェア東京にも参加した。両方に参加した画廊主の一人は「アートフェア東京は、美術品を扱うのが初めての人もアピールする場。Gittokyoは大作も購入する本格的なコレクター向け」と話した。(小川雪)